

上演6 2026年7月31日（金）1校目 中国ブロック（山口県） 山口県立光高等学校 『MorW（もう）』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 宮城県角田高等学校 佐藤 桃子
--	--

「私は、希（のぞみ）です。のぞまれてなくても、希です。」そんな一言から、この劇は始まる。母の再婚により金銭的余裕が生まれ、新しい家族も増え普通の幸せを手に入れたはずの希。だが、世間的に見ればこの幸せな状況も、彼女にとっては絶望という言葉がふさわしい地獄と化していく。

主人公である中学生の希は、母の笑美、弟の翔太とともに暮らしている。金銭的にも精神的にも余裕がなく、疲弊し切った母のために家事全般をこなし、努めて明るく振る舞う日常は、ウスイという男の登場により音を立てて壊れていく。ウスイは母にホールでケーキを買ってあげられるのに対して、なけなしの小遣いで一切れしか買えない自分。母が自分ではなく再婚相手と笑い合っただけで楽しそうにしていることなど日常のひとつひとつが敗北感と虚無感となって彼女に襲い掛かる。「おかあさんを幸せにしてあげる、笑顔にしてあげられるのは私じゃない」、「私は望まれない」という思考回路に陥り、笑顔になっていく母に対して自分だけ幸せになれていないと感じるようになっていく姿に講評委員の中には、痛いくらいに気持ちが伝わり涙が止まらなくなった人や、言葉に詰まる人も出てくるほどだった。また、トドメとなった「父親にそっくり」という母からの心無い言葉。母の世界にはウスイがいて、自分はいらない存在なのか？そんな絶対嫌！お母さんを奪わないで！というどこか幼稚で自己中心的な独占欲が彼女の心を支配していく様子を見て、観客である私たち自身も、とても胸が苦しくなった。

情熱の色とも血の色とも捉えられるような、ドス黒い赤色のホリゾントを背にしながら、希と母のふたりは高らかに歌い踊る。ミラーボールが光る。椎名林檎の「人生は夢だらけ」の歌詞の意味、見え方が役者の歌い方によって変化したように感じられ、キラキラした美しい光景のはずなのに、希が感じている黒い感情が痛いほど突きつけられた。

希が置かれた環境が変化していき、どんどん恵まれていくことや他人が幸せになっていくことに気持ち悪さを感じていく。母の妊娠や恋愛をグロテスクに思うこと、自分の思いが相手に届かずから回ることに悔しさを覚え、自分だけ幸せじゃないと感じている様子に思春期特有の繊細な心情に共感し、また、愛や幸せとは何かを考えさせられた。

ラストシーンで母に「お母さんそっくり」と言われたことで、母親自身も「希に笑ってほしい」という気持ちを持っていたことに気づいた希。互いの思いを改めて感じあえたことで、わだかまりが解け抱き合う姿に私たちも安堵した。

観劇後、思わず「もう！」と言いたくなるような、やるせなくもどかしい感情を揺すぶられる作品だった。

